



TITLE:

高台移転

AUTHOR(S):

池田, 碩; 志岐, 常正

---

CITATION:

池田, 碩 ...[et al]. 高台移転. 国土問題 2013, 74: 66-67

ISSUE DATE:

2013-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182896>

RIGHT:

© 2013 国土問題研究会 / 著作権の関係上、墨消しを施している部分があります

#### 5.2.4 高台移転

(池田 碩・志岐常正)

市域の中で、もっとも人口が集中していた高田沖積低地（平野）の被災者の今後の居住と生活再建は、市全域の復興にとって重要な課題である。この点で論議されているのが堤防の規模、とくに高さをどうとるかの問題と共に、高台への集団的移転の問題である。

陸前高田には、移転先として適当な高台がかなり広く存在する。第1, 2章に記された鮮新一更新世の地層からなる台地である。ここへの移転に関して、いくつかの注意点を挙げる。

- ・この高台は、もともと里山として地域の環境や生態系を保全する役割を果たしてきた。えてして経済効率を図るために広い地域をいったん禿げ山にし、後から植樹するといった土地整備が行なわれるが、それは良くない。すでに成長している樹木その他を残す工夫がなされねばならない。
- ・高台に限らず、新たに住宅地を建設する際には、その中での居住者の日常生活の保障が条件とされなければならない。とくに高台は、加齢するだけで坂の登り降りが難行苦行となる。小児、老人、障害者などのための施設、学校、医師、理髪師、美容師の域内居住、コンビニ、商店などが欠けた街がいかに住みづらいかは、関西で早期に開発された高台住宅地での経験から明らかである。自家用車がなくとも生活必需品を入手でき、日常生活をおくれるような計画が必要である。

- ・土地を平坦化するために切り土や盛土が行われることが多いが、谷埋め盛土は後に諸種の災害の原因をつくるので避けねばならない。
- ・この台地と、その東北側の高い山地の間には、第1章において触れたように、活断層が存在する。活動性は高くないと思われるが、住宅その他の建造には耐震性の確保を要する。